

私たちは、周りの人との間で、毎日たくさんの言葉を使いながら生活をしています。仕事上の重要な会話もありますし、買い物をしてレジで簡単に交^かわす言葉もあります。これだけたくさんの言葉を使っているにもかかわらず、心と振り返ってみると、胸に残り、記憶に残っている言葉は、語る言葉も聞く言葉も、意外と少ないものだ気がつきます。

言葉は、道具であるという言い方がありますが、会話をする双^{そうほう}方の意思をやりとりするために使う道具であるという考え方です。そのときに必要になるのが、言葉の正確さです。リンゴがほしい時には、“リンゴをください”と言わなければ目的が果たせません。言葉は、自分のために相手に動いてもらう手段としての役割も果たしています。

その上で、私たちの胸の中に忘れられずに残っている言葉は、少し違う種類の言葉なのではないでしょうか。人から厳しく教えられた言葉、嬉しいことがあった時に大切な人からかけてもらった言葉。そういった言葉を私たちは、いつまでも胸^{とど}に留めておくことができます。そのような言葉に支えられ、私たちは、自分を見失わずに生活をすることができます。なぜかしら、その言葉を忘れることができない…。言葉は、その言葉をかけてくれた人物や場面とともに記憶として残っています。

この言葉の力を、道^{どうげん}元^{あいご}禅師は、「愛語」という教えをもって示されています。

道元禅師は「愛語」について、「相手^{いつく}に対し慈しみの心を持ち、自分の周りにいる人をあたかも自分の子供のように思って言葉が出る時、その言葉は愛語である」とお説きになっています。

「愛語」は、自分のために相手を動かす言葉なのではなく、相手の身^{おの}となって相手に向かって自^{おの}ずから出てくる言葉です。こういった言葉が、私たちの胸に残り、私たちの身を支えてくれています。

日常の中で通り過ぎてゆく道具としての言葉とは、同じ言葉でありながら、時に違う価値を持つことができるということを「愛語」によって、道元禅師は教えてくださっているのです。

言葉は、相互のやりとりです。そうであればこそ、私たちもまた、自分のためという目的を離れて、相手のことを思い、相手に「愛語」を届けることができます。道元

禅師は、「私たちの命が続くかぎり、このんで愛語すべし」とおっしゃり、私たちが「愛語」を実践することを強く求めます。

是非、自身の心に残る「愛語」を振り返り、周囲の人に向かって、自分から一つでも多くの「愛語」を届けてみませんか？

— 終 —